士朗五七集 二

911.3
シ
2

法法華経黄鸝品序

妙見参閑云去八日ようとしされよ也
人の腸鳥よ無注むを云て腸をたつ
ありり有るか時うつり年婦る日の涓の
こ人へよのこゝろもこそめうそむかありハさるよ
かゝりしこ之津八たしよ衣をやしかくなり
をて行ましよ世ハヽ流しの花の衣よ
なりはゝ忠浩をと鶯孫枝よ嘩
う気の矣よ本ころ婦る時云人の

好しことして云魂をなくさむる於く
情のあつまる處なる つき是法ゝ花経
なる所いなり法ゝ華經ハ嘆基翁セとその
むかしを追慕するなし

朱樹叟士朗

法法華経黄鸝品第一

鶯の初音なかさん菩提のこゝろ　白圖
月をとりにて不浄もむかしかの　岳輅
山陰の里ハ酢茎の香ふかて　士朗
まくられの蝶を漾る瀧川　徐英
咲ケハ呉さけはこれたる杜若　騏六
けふも一日沸しかりけり　白圖
白須かる布のあくへ色もハなまくさく　岳輅
雞の目にのかれぬ門の口　士朗
老僧の衣の裾に撥んとなかり　徐英

のかるゝにきしくさ　狙板　騏六
古ゝ衣のはしゝりをちらき杖の風　昆明
よる衣の長きに逢ふ座頭に　方明
あしらひの月ハ城にたよひて　白圖
妻をとうめたる修業のやま　岳輅
あかるゝ筆に帰来て身ハ立すゝを　士朗
柳がら繋のはしゝくとちる　徐英
蜑が家の一本の楼年ふるく　騏六
すゝを惜めともてしむ下々　昆明
旅人の笠を寄るゝ小雨　方明
衣のやつれをちきる嬉しは　白圖

芋の葉に髪をとゝ落る名高き　岳輅
無の清水に顔ぞうつるまて　士朗
うつくしき黒ぶ御馬を選ねて　徐英
本戸をそとめにあける炬の火　騏六
今の世に昆弥の笑八きる絶　昆明
松の雀の世をなきしたる　方明
味噌の香のはしぬ筵をひまぬ　白圖
蛤子の家の舟を待ち出帆　岳輅
立つ秋に何ともいふ三日月　士朗
小笹のそよりゝる薮の露　徐英
鳴突襲猿に路ひてかれてあるき　騏六

南無阿弥陀佛と下駄を踏込　昆明

情しるきとハ人の行年哉　岳輅

又ふるゝ春も恥かしき哉　白圖

懐を花なき木の芽と身を備へ　方明

生駒なる山もかくる春風　士朗

鶯の梅に立端ハ気のかゝり　心雲

うくひすハこゝろも嶋へ梅　士朗

東風の里かな

鶯の啼ともしたる朝日哉　椿堂

まさしき此日

みすてよと鶯の啼に比ぬかな　方明

鶯の声を踏かく山路かな　徐英

うくひすや朝日の早き竹の里　羅城

鶯の居るも忘ぬ小庭かな　玉湖

鶯の影うつしけり枝かな　壽鶯

うくひすの身ハ夕こゝろや若葉の数　杜常

鶯の啼はりたるひろ野哉　槐圖

うくひすの聞ふけたる山の色　自樂

宗祇の筆しおく持つかし

ふるき人の手ならぬ八

鶯にかゝん寫経の小經冊　竹有
うくひすに家遠うしや藪の隙　素剛
鶯の小またくりそくり夜の枝　猿左
うくひ飛ぶの聲そそるぬ日足　岱青
鶯や雨の築山聲かしく　墨山

青柳品第二

夜の中は四方に並ぶ柳哉　方明
柳見へくみるそ些人のくらかり　樗堂

笠寺草堂をとうて墨山の部屋へ
詣ふ途中の口号
青柳や日たい暖そ柳すろき　騏六
川上も雪降柳くもり水　入素
青柳のたやかなれと初る魚梢田水　素外
つかまの柳ふかくる小池かな　大老
青鳥柳ハまつり筆ふかしら　百池
青柳農を無ひなり落葉川　大阜
青柳みはしめて月の出雲　魯雄
月にあるハ初つきかゝるき系柳　棋價
寄白図志人

柳挿し人思ハくなりきりなか　九成

春梅にまてなの噂を望こそり　大江丸

行かゝりし柳の露にの雨　素兄

春の東の空に梅の一ぬかり　岳輅

春梅が香や小家のひとつ川　士朗

夕柳高くして日にてぬれり　亜満

梅花品第三

飛ぬて鳥の声し河に咲梅川　羅城

雪消えする遊戸ノ梅さしく　士朗

何ひとつあらしぬ春の夕暮て　岱青

月影おかりに勝りしもぬく　岳輅

あかゝしと錠が隣子をあらく逃　桂五

箕児が水に流する梅の香　少汝

四方山の春を見る雲の名わかし　斗入

寺まゝの川ちの破窪を流人　羅城

きぬく水色かるき為る人の跡　士朗

耳擾ぬり我や流りかりきる　岱青

あくなほまその古巣にかへりて　岳輅

麻が衣を被く雪に月　桂五

すてなハし命をひとつの浪の上　少汝
御裏なる殿のうつる藻塩火　斗入
鳥見ても寺に葺をたてこめて　羅城
月のさしこく蛙鳴なり　士朗
百なりのふて一里も二里も峰の花　岱青
山田なる衣なる蕪に陽炎　少汝
傍のまもやまかりくる釣瓶縄　桂五
竹のなる病を挑にきつなうしろ　岳輅
むかふ所なる嫗もハ桜のたてぬきて　斗入
猪船の舳端もいそしまう　羅城
菜畑のやさしきをぬに乾まり　岳輅

おしなべて人にかゝる錢かな　岱青
立すりてハはやりて由ん湖白山　士朗
松まつよき星合なる寺　桂五
志らつ露八月なる隅より出るら　少汝
芙蓉なる花のひとり沸しき　士朗
うつろふせて足袋のうちうす桜の上　羅城
鶏のやまけきか梅ちもかひしく　斗入
菓子盆に袖をちらけてすくみ　岱青
ほそしなる中のハ以としふるなる　岳輅
まうしと仏をまふたすく米の富　桂五
百足なるまししふ草とよりふ　羅城

花さへはや重霞ふかく見に盛なり　升入

雲とみる雪の汀の大事かな　少汝

芭蕉葉の先ひらつやし冬の梅　天光

口の霜の梅さと婦りぬ今年かな　兆雲

　小野のゝ社前にて

うめの花白きハ神の心かな　長斎

以の木によとても白露咲梅の宅　玄光

あかり来て見えし八一輪梅の花　硯松

皃探る袖にくもらぬうめの花　栖荘

批七　巻四上　七

梅の香や鴬の聲八方けたゝましく　竹有

うきくものまに猶る夕の山路かな　杜石

横笛に梅吹ちらす雀かな　士峰

　春宵一刻價千金

梅の木にしもゝ年家の宵かな　松兄

嵐井に雲舞うちり梅の花　大魚

老木の梅ちらして一本いさきの色　逸漁

よしたき来る身の[illegible]菴の梅の花　卓池

名ある梅の花紅たまる茶のまめ　文兆

難波津に寝所の[illegible]の海の花　月居

見る梅の何年り會さに人も来ぬ　外六

うかれかゝやはまつくさゝの御出　多柏

見さめて月はてしらまでも梅の花　呂利

うめか香やをまくらと月のおもしろき　左詣

枯草垣にそのひしほすまて小春
見るまてあかき女の着物のとりかへに
中んといふに

梅か香にぬれてもみたき月夜かな　寿松尼

此山の梅見に中らん来る年毎　方朔

宿る梅増賀の席も白かつし　菊彦

山里は梅さくものありうきたの花　騏六

落ちるて梅の花ひとめる外　白圖

ひとつはうこくわうや梅の花　素樂

春雪品第四

春の雪椿の葉に溜りけり　自樂

春風のまくりけたる小雪哉　桂五

初も外へと出ぬも消てし花の雪　松丸

きえるの絵方に行燈しける色

素樂のくせある衾昔夜ひ隔りて

あさ雪の降に消ても衾の衾　紀觀

伊勢浦や波にまじて海苔春の雪　　自徳
古寺や春の雪ふる朧月哉　　素郷
春の雪浦の苫屋も柱たて　　斗入
むめの雪積るハ花のちりゝかな　　杜九
風流の底にてぬけたり春の雪　　羅圭
鳥影や雪ある軒の春の字　　彫門

朧月品第五

月出て牛一声ハ朧の角　　趙息

ゆすりし紙扇捨ひぬ春の月　　魯隠
定まらぬ朧にもある月夜哉　　岳輅

舟中

おぼろ月真向ふになりぬ男山　　昆明

おぼろしく

松よりハおぼしなりおぼろの月　　如髙
春の月流れ出てりおぼろ川　　寄都里
朧よりさそひ出たり雲月夜　　青霞
谷鳥に雲ハ流るゝおぼろ月　　空阿
人の来て詠出しさま春の月　　素桑
松に皆暮にて似たり朧月　　芦涯

水鷄

蕭條のおとつく夜ハおほろ月　奈外

舟まてく人も這出ておほろ月　紀鳳

山鳥も旅寝あつらておほろ月　重羽

おしつゝ夜ハあらく敲りぬ暁つき　桂五

鳴蛙品第六

淋しさハ人にて花よそなく蛙　蕉雨

鳴出して田にしを起す蛙かな　大阜

雲となり雨となりすハ鳴蛙　白圖

蛙なく泥のあちこち火ともしぬ　子繩

蒼き夜の底ハ見えけり帝なりつ　墨山

鳴蛙死もさぬ株ハあまりけり　芦丸

豊川とふ所に日をくらして

うたゝひに蛙鳴なる山家かな　帯梅

瀬戸山にて

蛙なく垣なき菜の木の窓外　戯青

せまりしいくさもさと鳴蛙　友國

山吹にさける蛙の声くの月　入素

陽炎品第七

かげろふや浮ふりと落る蝸牛　士朗

机にちりをはらふ笑声　岱青

大せつな花に古橋の実据て　帯梅

泪のきこゆる枕ハしづかなり　紀鳳

かゝる身もつみハあとなき月の雲　大阜

往来の多き宿の秋風　墨山

青芒にハ葉をやたらに刈捨て　岱青

大路ともに温泉ハ沙汰なし　士朗

尼御前旅の袂もしぼりつゝ　紀鳳

膳に銚さし遣せ給ふくま　帯梅

むさんやな鴈にまゐる郎ら　墨山

楪に南のかく元のやよ　大阜

月遠き吹華に雑子を飛出り　士朗

鶺鴒がふる恋のあるさ海　岱青

末迄もうるさき数を送る春　帯梅

志に浮く西にちらく気に抱　紀鳳

山綫に矢を負ふ雛子をもふさん　大阜

年を還る六十装　墨山

梅の香に鼻のふらつく窓の外　岱青

嵐の這入て鉄のあけたまゝ　帯棋
張衣の洋ふ茶る佛の生　墨山
蓮もすてもも三にろ日の花　士朗
由けいハ文ましたの床る砂の上　紀鳳
河ら松よしるや日の漥の鮫　大阜
松乃ちもし山書を末末の落葉　帯棋
由ぶへを以てく八日の月　岱青
秘房を不破の小家に見付たり　士朗
中将とのゝとくさの家　紀鳳
同じからぬ源をヱ家ふとゝめぬ　岱青
更て包むも白きなり　墨山

雲ふきし火の取し出し狐の鳴やらん　大阜
出つかる能緒る湖の氷の雪　帯棋
ちる花を見ふ由く人の誰着て　紀鳳
物り乃やとりをむすふ禁厳　士朗
夕暮ふ亀椿の音のひき合　墨山
むしくし石のぬるむも　岱青
陽炎ふ神をきらしく捨中ふ　長斎
かけろふやフ刀りくへと眠る人　斗入
のけろふや神ふたまる松の脂　卓池

月見えて夕かほ白く露かな　洞里

渡る雁見えすとも思ハさりけり　雲帯

春夜や柳薫さし出汐立田川　圃暁

菖の
風羅翁の世に似たりたとへ八

月雲の風のそめるかなしし　壷伯

やうやくして露しぬとの八月霧に　若人

また一として居所もなし夕桜　双鳥

以まくらさふと打ちるや花の山　其谷

すゝ路のゆとまつりしき霞かな　蕉雨

宵月や哀れ猫世なる夜寒のこ

月と花とまつりける秋の末に　雄淵

蕗家

三日月ハ己か住家の月夜かな　李臺

砕あきてひとはやしく志ほ染の

印よりみえし姿さえあへる

きのふより月ハかけたり雁の声　騏道

人に従ひて雪の降むこ戸口かな　希言

暑日や花流しむ蛙の声　菊溪

春風の月に吹るり山の上　長䧺

秋の雨縁より落る音かな　蘭二

かりそめの雲に招く志ら出来り　素外

中天をよくも見えけり三日の月　芸門

表半は名門涼は寫になくは何　可董
雛子の夢月ハむら松にかゝれり　鸞圃

淡海道中

一日ハ風に醉たり春は旅　沙漢
風もまことにぬくし二月の新男　五明
霧を立ての入日とふく螺の売　楳價

送人

松風は先にたちけり秋の風　関叓

灌園

橘や何を占ふとなきし砂の上　卧央
うつし植しみも春て萩の發　庭甫

露萩は繁る方より靡ハ明ぬ　延至
二日刈　若ハ二日の志くれの車　五周
荒草から生つ行廣に見るて亀　文左
鶯は蕗はかろくし菅の花　垂竜
鉄鑪や立たる煙紫は舟に　巣兆
山路下りて絵に花を写す秋の空　如毛
穂芒は残る小沙の緑　仙布
漁舟小萩の上に見ゆるかな　岱室
夜の風はちよつくと吹て小雀　柳涯
ものは上に日数経りぬ廿日宿　啓甫
春雨を人の見に来る小家かな　大年

みよし野ゝ雲にまかりし小夜砧　松人

思ひ出ることゝゝ秋の夕かな　葛斎

蝶く八いくつ残りても静か也　雨滴

月前よ竈のうけをかと殺よ　多宜

ふりかへり鴫の小麻の花すゝき　珉文

おのか扇流るゝ水よ草のきわに　春暁

二日月くらくもなきぬかしの花　其成

きのふまてなにも咲かりしの花　魚日

落霞山神から見ゆるか　帯楳

すゝきの里をとんてなり山のよ　昆明

もろもろに見えてかへ萩の露　蘭水

こゝろ立松の雪と志かし花胡蝶　紀鳳

何る寺小一夜をかりて
蛙とも其影をなかめて終夜　羅城

おほろさこの人ハなかりし秋の月　岳輅

味噌塩の浮世ならん雪の前　少汝

山寺や花よりさきハましてさひし　士朗

むかしよりかくなるやと花　岱青

寛政十年正月

撰者　岳輅

山吹集

墨田川の流布しやうなりし
きよし蒼武春成名々
於りう梅英の藪かけま
御蔵前小路より西方け
はるし宝やいふその は
豊菜の前出すり尾張の
朱樹叟の方より加へまし
長卯まちとて杉むより
来る樽を見て毎より
溝溝の網つりし様て

さゝまくて小舟にしてきぬ
たゞ頼し吹をうなにすしと
吹嫁るハ気つらしき
事にと人くらちちよる
春乃日をりちる花の名残
楓のみか葉にかちそらむと
みや雨けらしと峰出るよ
雑うは篁一かいきとくまり
待るへき花毒も云ゑん
ふりもへつちまる野中
すまハ暮ひとつえまひせ

すまそうそ絵たる爪抄く
ましき人そ忠緒来らけ
露しこのきし
あするやましふきをちら
手折りし露済きし
済かしら袖を
松風ひてなくらハ出とを
いけす立帰るをしま
白菊時菊の猶にあハ
をくしをとゐらして
こしふつひたる挿ひ

なりけりはくる作る
かの集ならん山ふきと
名つくるもうしきいたるを
なしぬすや

寛政うまのとし

みちの花
みちひこ

山吹集

四時

桜はらしひと本をくれ山風に

春雨に菖のうきゝ檜垣り庵

居士浮世て涼しき月の庭に

鴨まつや霰ふるなとの音のやさ

南登月欲菊岸て香しくれ維や

朱樹叟
士朗

右

あらと我このことに水魚のちぎりを
きむすふこと師恩の深きにすがりて

芳野なる今や尾陽の朱樹叟にて
春もさくらしやうるゝ僕ゑ用し
ふたゝび雪まろげへ序跋を送られ
けるに歎息して独りも文なかりし

夏草や虫選杖もこゝまりぬく　洛　嵐月

老鶯柳ハまどうすりけり　百池

二日月くさくらの雨をぬぐひの　其成

山のやなすき豆腐の花にあし　月居

花すゝきとりもなをしたるかな　文左

たれみも
霧月やうしろ尾と捨るかざよまこ　旧國

花のちりき椿に散る山路かな　如み

裏の山蝶の風情にかくれけり　林六

夜の梅花むすぶ手とかを抜かし　魚隠

畑うちや霧の暁よりあかり哉　凡十

さくらの咲しある糖ハ鳴しぬる　文雅

日ころかたるよ台のまゝはゞを
いひむつあるうちかし　それ
うつハとのなりとて士雛の
をしよ利花押の中かし
あるとよろつるゝ中して
人よ今卑身の鏡縁とれかも　東武　午心

ゑぐ芽つ 澱ひき強すり流るゝか　烏明
まつ冬や旧暦小の十二日　雞口
芒より蛉の出る宿ましふゆもり毛　巣兆
うの花は濡ふしとよむ手紙ふ　成美
うき草や梅の瑞るゝ桶洗ふ　梅谷
まつさりと蛇の落たるゆつさゝら　梅友
梅をちらしゆもやつ浸その一会　双烏
砂ふみや春ふのいきさふり毛虫　一蕙
雛戸出や蝶花の香うつえそめる　菜波
引重の花ふの名をまよゆふり山　魯哉
凡ら来てしも菜霜れ八七り月　基我

ちりくのはくるふせたゝきみじかよ　且く
蛙年のまり浅めくるかゝさぎ　女 まも
草き芽の山よなる紙よお月　その女
ありしや今は心いる古木の門　うの園
ふり捨し花も盛り雪のすゞしき川　完来
曲さしとれのれもそり月朧　きち彦
ことちの花く
大なる蛙笠もして雨の宿　福二
きのふひの雁飛まる手月秋かな　佛二
檎はむそちらはくりの落葉かな　乙二
芒なぞ花嫁しきこのくかきらか　管俺

まつりや京家の武士の袴形　五明
月清ハあかき紗にもうとむし　蛙眼
朝々や露まりうけしつるまとへ　汀砂
丁々とハ鳴子高き杖りうか　布席
芋萩や日和のうハ家鳴りかする　も木
雪やけの人すりとなや若菜稿　秋支
鉢たゝき行せのおなて涙となり　浪々
をしむへき去も緑せのなかりかも　上総　如帛
若芋の雪緑るそくけき柱子か　白羽
こゝら来ハ水の庵より若ふなり　柳荘
樹も芋もやり寝しけ色星の朝　三方　五竹

夏やとの蒲虫すなわち萩の花　甲州　可都里
太宰ハ月まて秋咲さらし小ふる　三方　蕉雨
うし粉や小高く咲し桔梗哉　下総　塘雨
鳴蛙ひきり蝉ハるなりけり　伏見　いし丸
不老ふ雲ハはうへて杉かの月　空阿
うれし飛去の中しふ鳴日ハ毛むくむく　梅便
浪々藤うし蝉けし髪色去の家　筑前　石蘭
菊下の匂ひを出さし鳴数ふ　以京
麦杖や弓二種二人とひしさとく　可十
来うくしや只しろ畑の石二の山　サツマ　斐里
夏の夜のたてやぬ海の早さふ　赤間関　花休

蝙蝠のまくらに落る雫かな　ヒコ 綺石

こなたに枇杷園先生持

風呂敷結ぶそのこゝろを

壺中の玉にも勝る桂菴の

ゆるし給ふ千里独歩の玉とや

いはん

うき雲を帯る地を出ふまし手翫　豊後杵築 ひさきら

赤犬の常に花の中に吼る哉　アハウ 青雪

尾張

ちる迄ハ桜の夜ハ消えぬ山ざくら　桂五

湖を降りて見えかけて鳴蛙　岳格

蝶ともならで羽をまだ持つ川やなれ　[illegible]

うそ寒しやの雨の世帯の名残哉　少汝

蔵らしいハ雲の中なりおぼろ月　李臺

梅ひと木まるゝ鉢の[illegible]　松兄

海のうつハ嘆きもしらじ[illegible]　卯衣

人の家のうらをめぐりて梅の花　燕武

おぼろ夜の寝ハまつりまで明るなる　素霞

ちる花や何ひとつなき砂の上　卯央

雉なくや垣ハ菜の花の雨　岱青

富士の嵐の蝶の[illegible]　杜石

梅咲て其のこゝろを遣りけり　帯斗

陽炎や菜の鼻つく牛の尾　白岡

初花や梅のむすびの梅の華　鳴立沢 葛三

ころもがへ渡して山前の流かな　加賀 沖入

鴫ふきつ雪ふく菜の花明りかな　蒼虬

明日さす若菜ハ月待鴻かな　サガミ 春鴻

春の日や夕月の菜振巴　下ノ野 長翠

糸未ものうきのきし花月夜　ゑり介

ひるの蝶や花のなくよしき鳴　大谷 祇室

瀧音やほとゝぎす鴨の脛　小倉 蕊松

山の花菜たしかに霧にかな　嵐子

中山や雪しさして小一月　四友

淡き水影おく唐の月夜かな　弓雪

ひる野や鳥やまうて大名堂　渭水

小倉文色

霞立の山に住る人曲り几　布中

菜の鴨帰るるかれ入り　諸り

寺鐘さく初精人の出る客　木文

夕顔の花いけと見る紙帳かな　楚摩

山もえる春雨を見る花の頃かな　呂兆

桜の花の霞をかつまでありけるかな　麻里

初雪や根の蕨東風かる　十邑

石壁の其はしの夕の雨　古義

麦蒔て菜種こほるゝ畠かな　北濵

○

卯の花や萱人の指さしけり　心水

世の卯とおもふ穴なき月の影　風篁

冬の夜や葉ハもとの影に残る　花利

素柳にひらめく雨の中なる哉　文荷

梅枝ひ梅花の色香夏の月　東園

かきつばたの嘴られ書や夕すゝみ　百江

ともし火の桃にうつる梅の花　柳字

傘を差かけてゆくや柳の風　竅香

晴蛙ゝ鳴子に浪の上を飛　一笑

萩ハ明石堀やりハひとつの潮かな　涼雲

とくとくと峠の様子宿りかな　起凡

宗き茶や身をふる夜を留てる　偶中

嫁入との忠実に逢て茶なり　徐行

早乙女のまだ見てよりにけり　梨雪

落る日に浪の音たつ松の海　仙梔

雲に日の影かゝる扇子山家　市雀

夏の夜の蚊に羅り蚊を立見哉　杜良

蛍やふとんの先の壁　調二

夕暮や袖の二つ　可須

芦の葉のうつる汁　芦舟

てふてふの塵塚をしてありかな　有芳

稲妻や知らひはの杉の上　里洞

中〳〵き織庵かり庵し蘇の露　其柳

送り〳〵佛の子ほめ〳〵紅葉かな　紫桂

七草のあまりに蝶を森をとぶ　一溪

雲雀出て雲雀にもとるかの跡も　志流

夕の花の落て浪うつ川邊かな　芸土

きのふより梅の月日を咲にけり　路長

我友の縁をきつて杉の蝶　巴文

荒月西鶴の出て舞大井川　遠水

朝夕の日にかゝり雛の花　千村

連句

雪梅に篠の餅のえるゝかな　豊郎 紫基

引ゝり雛子の庭もし紅葉哉　牛後

松の衍出色いつもつきさく哉　君 素人

風情やふうり遠り絶手　わき

四時吟

正月のなさを色を感じゐる哉

夏つゝと蝸牛にあつし山

朝々ほの露にひらきひらめかな

冬ぞかり待衣やさゝ散かひ者

君

了空

禁中のうちに遊しはつかきこえず
たかし雲井の月はおもしろしをあふぶ
猶うきにたはふるる中すずきて
ふうぞく翫ひ法するにまかのぬし
かくしは風雅を琢磨する
夜なよなまより程はんにかし
さ既ひとしく争ひしきは腰を

蒙く気がしてきこえは手銭引て
院よ寄山の下論に至れと
まそとの切り判者の任を
かうさえしみたをまた彼
増々はおふよふこひより
今の栄に至て婦
俳風の正しきを勧めひ
よりて小冊と為風雅の

神にそ置し草数清
名を契る想をむすびてしれ
とのこゝろをも洩さぬ掛衣
唐のからしき字を書をなさ
しむるなり

寛政十のとし
戊午の春

名なし草集

春の日乃花の木かげをまとり
秋乃月の蓬葉の露に昼やる
なき夏京はむかしハ萬代もあらう
ゆほしう去て後にあのつらら
見世あつて又いつしきもたかり
目適はこれあそびのひとつなり
ふ二乃山をも先て紀との糸く
あかしし雪のかしき雲の色く
すゑなまて人のこゝろをもてなれ
はなくすゑき始るハ春秋ハさかえ

夏の日の照りてつくすも冬待
秋の際に離るゝ所も　唯此山残
又世八世の中の用若たくと忘れ
猿なしし き事もなくてなん
なくはさ帝済（ここまあそびの二ツやし）
東坡居士乃秋根色れハ五十七勢
いきこゑ百年の生のしこうあそ
として太の下に乃る生をけしこゑ
梓乃木なんとなる世わもしき
菴のうちにおとふとちゅまとゐ
しこゑ 蓮のも なく様ひたらんは

ハふ玉の緒も世をもたゝのり
まなび芝（足手ひの二ツなり）
鶴の足なかし鴨の足みしかし
よししやこの所名なし人のいへ　家
名なし鳥戸案て思ひもいのい
世何をなす故をなそふと

名なし翁　志るす

寛政八丙辰年

秋の遊ひ

雁啼やきえて又見ゆ天の川　可都里
月なき磯の秋をまつ旅て　士朗
柳散る宿の桂も苔むらん　岱青
西の衾のとるも悦しき　斗入
馬追ありせり立らきし胡朗　岳輅
くれるといへるにかに狙の子　青
小松寺の網木の樾焼そこねたら　朗
霧ゟ帰る所ゟ夕日はの中　輅

咲帰る汲後あり一声郭公　入
なからハ八七年あり山のさかりぬ　朗
さくれ気も色でもよはぬんまで　青
夜涼き鵠あり豆腐切こむ　入
月夜の紀吹草紙も色ふなり　輅
雪踏ミしする猪木の念うし　青
蒲の英の尾さり紙中も紙の腹　朗
それのさりりの色きむらくも　輅
花念り書乃極と升なり無人　入
車なうちかは泣人も誰そ　朗
此所をきのふ紙面と若竹や　蟹守

ひら〳〵小ぬかふる蓑松　鏡平
世の中を安く暮す橋の袂　五芳
臼杵の所へ山ハのかゝまる　里
酌汁の曲ある人有つかはまとて　平
棣棠ちるまでハ御花煮飯　守
秋風乃白河まてハ程遠し　里
火ともし行をあけ方の月　芳
さまハ〳〵若き御法を忘れ　与
己か学きはく千鳥帰るなる　平
此節ハこれ急ぐさの冬あり　芳
二布絹しふれ裏の檞木　里
吉日のゆるとハ大ひさく為日まて　平
あふし涛きゆふ畝火耳臣　守
山鳥の尾呂ハ見をしと乞ひ　里
ちうちう瘤ますて妻有添なり　芳
文覚う取ちらしたる数の筵　与
ゆふし日すりふ落の保ふ菊　平

之きく

思ひしや作ふ恋くて数ちの川　漢甫

人のうへを流れてはかりな銀河　蕉涯

草庵

胡皃の秋ハ葉に花咲かなり　擲冠

胡皃や咲かて咲ても秋のもの　嵐外

見定る露もなしや萩の葉　芝表

吹よせくれは秋を押しやぬ芭蕉　五芳

花芭蕉よけハ見出る戸口かな　長翁

もくもくの葉の中よりもれ芭蕉　英紅

大磯のよしと見えし　擬女

尼となりてのもの古さとなる

安通むかし語りしと聞く

すゞしさ残るとなり

草むらにすゝきたる河原女郎花　美貫

女郎花活けて置く草に交りけり　如毛

朝露や蝶の羽の重さかな　梅子

星清し夕雲ハ晴行となり　白黛

赤とんぼの影うつる仏前か　政尾

夕風の吹きやりて秋の声　常川

西海くと松に降りても秋の暮　白楽

月延の山寺語き寄る

逢坂をこえて極楽橋に鳴く

虫の音杖に心やなかりけり　金英

きりくし秋のこゝろをなきね哉　笙堂
夕暗き尾花萎くして立よ哉　南丸
秋の夜やうしろ沸しとおもふ夜に　石蘭
ならつ居小鳥合せする峠かな　三車
いと南こゑきき世中して
秋の夜どおもふ老りよ萬よ哉　倭士
居守て寐たりおもへば何る夜　其成
雅かして朝白蕉丸よ出よなり　益丸
我老をこのろく来てふけ秋の風　星布
沖の小濱小波のよする夕哉と
繰あひし笛根源を見るとて

秋の海よるもはるく見なぶなり　祥東
大やあはのたしきせいつも三日の月　素礫
秋来はあまし一すじの月夜かな　似雲
砧打居りは身よ添ふ月夜哉　羅城
よるは皆白きくの気と咲よ哉　有丸
嵐雪が吟もきる事なすら
裏表ききんは白紙で持なる　陌洞
朝くものとも筆の気をとくむ彼かな　府坊
山残んえる静よ居れは筆萬寄　七人　左好
此なるえとひと行まてその
ぬしは秀しくあらぬ書を

のむの名くさこゑよせんすくも

ある事

橘の実を啄ふちるの雀かな　重厚

降雨ないつをまてしの秋寒が　雲帯

おもしろき雲の出ても秋の暮れ　素颯

何処ともに鳥が飛なり秋の暮　古明

草の戸やたやすく見てる秋の暮　書龍

とのつへハ小萩のよこる秋の暮　兆波

寛政九丁巳年

萩の遊

萩の花ハ心乃あまるたよりも　士朗

たとへていはゝ萩の月人　可都里

舟もよし山もよしとや泊らん　静菅

涯たる旗取りに酒ねくとの遊　捨来

蒲むしろ敷たまゝ見つゝ居て　漢甫

鵲をなかなる木因の影　失洞

伊吹と八十月はの名なる道し　里

剥出し沙汰の縁ぬ夕暮　菅

命ありと漢瞿麦を屈して　来

慈あり淋しき菜の湯こぼす　甫
美しく色の好まする隅田川　洞
生間の霧よりの川と出る月　来
幻の声ぬ泥をも葬るなり　左岳
そのくらゐ迄ハ芦荊ふ行新　里
花の本と咲える植る家の小　甫
けむ川年ふ稼ぐ出ふるし　洞
長生をして来柳を唄ふハ　里
出ろの鬼をのぐ人く　岳
漣ふ家三井寺の新見えて　岳輅
大角豆つめよと胡ろ帰　桂五

水付けくいろ手もせりや新髪　古明
捨てし里に猿のワりまう　朗
歌の丸うまする事と宮姫らし　帝青
柊なく有る口ことの粒　此
孫の子ら築を左に指動て　朗
今雛くし拵る肥後の角力取　青
裏しく荻引き出る月の路　少海
水の上ふもきこしくに帰　路
小舟さん借るやゆ峰の秋　素
志本の新笑一本涼めむる　朗
おもくと戸部の行を打き付　五

外田の窓に寄せて掛りき　春

ものかけと挿める続の限まで　朗

春雨と雨も降るあいだハなし　昨

咲附て句ひ桜もこえ付ぞ　青

何を啄る四五十乃鳥　汝

くはく

なんくに営に来る裏の山　蟹守

うくひすの小枝へ留りたり梅の枝　猿左

鶯乃声ハ待ひ出む日さしりけ　白図

うくひすやそこつに帰て二日あと　外六

我庵や梅を見れハ菜の菜畠　阿基

東あの後何に添乃ん落月秋　無曲

月に雲あるまで梅の香ひかり　亀夕

坂あり残り遅く寝るそ梅のむ　貞松

木なくまは人声茫し梅の月　遠之元

香ハ梅の香に呼ぶたける月影　伯先

病中

寝覚に半分見えぬる柳かな　蕉雨

春の夢よく覚えて忘れけり　虎杖

まつの霧ちらけあり二日月　壽倫

正月も月の数とすて鉢より　菊羽

きさらぎやうきこしあまし人の恋　騏道

夕栄や浪なき雨を見る丁　花縣

垣ごしへ寄る斗よ綿子の声　天老

鄙くもる水は蛙のさかり哉　蘭二

ちりつきのやうや花の胡蝶かけ　大左

ある山寺に泊りて

蝶とまれ荒び仏の手にとまれ　捨来

松風もかしよ田舎のふさわき　鹿古

かくまでの花そよぎて鳴内かしら　少汝

馬刀ゆりの斯くかりありてくるか　方鳥

山吹の散りへ垣ある菴罢ん　恭昌

荘子画賛

ゆめらかふ蝶や菜の花むすなきて　二柳

春の人名も柳ゆう色なり　臥央

植木をも見せありてこゝら花の六　可申

江小涼ふ畑は桃の盛り哉　車大

おうろき菴や桜にさひうつり　士朗

何もうさくらのとうにかな

詠まなる相もうけよりかひ哉

花の菴菴のうしろは結びけり　鳥語
奥山の菫ハはやて散にけし　魚隠
雲霧の滴を落の秋時分　徐英

梅なりとし
冬こもり摺ひ波家ふかくろ
やうの梅ともに出つ何ちくもやしと
うい法ク古示十と絵年り帰りなり
老ん老沙の書摺のもしたよ法く
一気しそ見出たる詳夾侍よ在て
とゝ示脇の句得つふ法つゝん也し

うゑしおきし…のあたりの人かね
しろく咲出たる…をさきれハ
なかめ…はなれかすゝに
おもひ…とは…ありけれ

冬の句揃ひ

おくらしの中にきえなき枯ゟ　闇更

冬のさびハ鳥にやすけ…　祥東

淋しさに匂ひや浅水ん…十　可都里

月残る…麻売のう…　鱒魚

さゝ波の枝を一里に詠やり　六珈

いゝに結いし…柳しち　美敬

人こも餅喰ふ朝ハきたらんて　臺琨

釘乃飛ある中庭の梅　里

うちはらしよまき…菖蒲草　虎

松もひのことよる宵のむしろ　珈

稲扱とる鬼をもるに花さかり　魚
咲ってと渉らぬ伊勢の河上　琅
ふるひあれ[illegible]をやらむ　散
秋照く[illegible]　東
すゞめ中ト鞠を蹴られは眼の[illegible]　里
都を迎る僧はあらく　魚
網代木に[illegible]丸うつらふ月の影　珈
定さはのりて盾の落つく　散
又あひつ[illegible]猪の尾を[illegible]　珉
さらに宗祇の杖ハとゞまりし　里
ゆきふるを[illegible]の[illegible]　東

あかゝ色涼く[illegible]の香は　樗冠
辞出る[illegible]男と[illegible]　魚
袂[illegible]を僞に一吹　珈
十月の[illegible]八[illegible]しき流る川　散
足袋なく人を[illegible]送りて　珉
金捨ふ採りひむかしく[illegible]　南丸
見ゆる陵[illegible]は揺る[illegible]　東
豆出し明石の月のわ[illegible]　里
精蛉[illegible]　魚
紙取り乱[illegible]　冠
むし[illegible]の山[illegible]　散

かけくりと旦那踊のく菊のわと　珈
愁はくくさ幸の少なき　九
乳とまま事て二人乳やる宰の捨り　珉
障子のうちのくふるいかか而れ　冠

名ところし

不二を出し雲より附ぬ神なり　恒丸
筝乃菜乃志るきなりけり二日月　春蛾
聖窓たて門ハ日番て加附よけ敬　玉脩

江村旅泊

志くもなり秋ハ有明の秋じなり　紫蘿
とにかくよ旅ハあけぬる旅哉　漫々
一柳行人の潜戸ゆすて枯野かな　都維雄
大根曳て松ハひとりまろりかやり　成美
ゑもつ鳴て千鳥鳴夜と鉢よ色　五貢
あてろよもわする折わり小秋千鳥　如雪
むつまじやそ鳥今中の三秋歌　一草

戀

織衾一枚ふしきの夜むかし　月居
くかるて梅の蓉こさうし冬籠　蓮坊

灯ともして人は志連つく冬の鷺　冥々
捨る紙庵や松風桐火桶　桂五
岩盤木より時雨冬の月　菊溪
山里や包むものなき冬の月　臺珉
小塩は山も隠るとみると
大形も家のはるなる冬の月　鯔魚
　ま墓の里を出て
春杖下しおろしいく地中ぶ　静良
こおろしや只白妙の峯二ツ　冥史
出雪の吹つくらせし難波ぶ　長翠
おろ〱と日影ゆるる雪の山　竹有

晴る日の雪出ふ紙子綿よし　春鴻
よるの雪月は其人に来よかし　柳荘
月花のなきしよきて雪見哉　左岳

寛政十戊午年
夏乃初越ひ
竹の子やひと夜にかつく八重葎　暁臺
雨残あるしの鼻厚木よかり　士朗
帰ぬるは山ほとゝぎす吹絶て　岳輅
水清けれハすゝ手の羽　方明

寒き雨に朴の廣葉を吹かへし　杉　仙青
ぬかごの汁のおもしろき　路
呉礼竹をしたゝめて投ふ形の露　朗
七夕星漢もやゝ西へ流れ　青
加茂川を西にうけたる夕涼み　明
大江浦々の出む時もなし　朗
家鳩に枝の米を打拂ひ　路
もえてこそ雲にみぬ言葉　明
ちらりと見をもて来る月の影　青
楫むかふ春の渡戸を離れけり　路
うき名たてぬ人に恨やつくすらん　朗

尼になれ今朝の俠　妹　青
鶯にうらおは笠の花落ちて　明
苔の露の主見るらんかふ　朗
やすてもなき渡より空を惜む　路
足袋拂ふ茶店の僕　明
塩魚の伊豆はち渡八山家にて　青
入日の赤き胡　熊の雪　路
叔花よむ木の芽の春の恋は　朗
寒くて人を通し　寺　青
湧出れ温泉の二筋に流れて　明
木枯風寒く歯の抜る月　朗

衣ぱへり脱ぎすへ八つまて世　洛

梅屋の芸を一本よしこの　明

麦流ぶ女もぬまる袖时雨　青

目清く紅葉を見たる木啄鳥　綵

極り来を伯ふたえん小社楼　朗

佃乃住居の汐着分る紀　青

子日ぞる松よ菜の契ま神て　収

矢具山のとし奈良坂の衣　朗

きしは帰り東八一竿よさけ衣　綵

神ふむひてとの思ひ出に　明

かさく

咲ほこく萩の花葉ふ　斗入

色きかしく花葉ふ上の月森　鶯居

何ほかの分くさまりし紀花葉ふ　友國

盗盤猫藉より

質客よ来さをわるまよ蜀魂　六珈

我上よ鳴わたりたらかきし　莫二

蓋の戸をさして出されハ宿なら

江鳴よ趣ひて　壷伯

あらし記す夜汐の引て静く　何鳥
部るにさきするのはしきぶ　岳洛
何の木よけの心そ峯古香る　う鳩里
来ぬ笠よ雲の分き口よぶ聲　五明
こしかたや日枝の山風渡の音　杢兄
津に浮きみしか夜の露深　墨尚
久しく訪さりけれ
棲冠うつを露拂て
さ海くの草とも見しか芥子畠　静管
白布のちとしも見ゆる小家哉　希言
極子恚いの蛤も咲すなり　葛三

雨うさや柚の花こゝす一ときり　双鳥
甚の菊咲か散らけに咲よなり　巣兆
世に在るも松の葉に散ぬ月哉　紫暁
鶴啼ひらよ笠舎りして
霧りうあや兎ひく人を啼けり　美敬
日寛中やうの泡に氷室山　狐山
多き身鈍りそり早川の鮎
吟せんといふ人のあたハ三里
あまりの岨つたひをのぼり
くりそり椒茎すりうハ
忘出草山路も捨す咲なり　真洞

青鷺の首の下なり淀八幡　百池

精霊迎ひの船ハ淀ゆる夜なかなり　夫雪

人もなきて子鳥聞へり川ちどり　定雅

月涼し秋ハなすこわかるもの　棋價

夕立やとちらをみても雲の筏　一之

三井寺や崩れて曲る雲の峯　昆明

みてしまふ秋ちぬ紀堤を菜なり　鏡平

花摘集

俳諧を聞くに古き風をわすれずして
われと好るき人に新きゆへは　新をこひ
新を兼ね新しひするゝ今にいたる句
なきとい家八分るき事をふかく
忘ぬ故なり也し新をひとつのみなき
こゝの花香志はその香をはしくり

山ほとゝきすの声音を吟しまたまたは
いとゆかし家に好とをうしくなりく
しかる後にして蜀魂関夜行
過よまし　牡丹の宿の寒暑

草居

花よのそこのれつ香靄しかる
牡丹のうつけしきよきあ
ひきまり
あくるりひと声神ほしくきれ
小ぬるきハ身ゆる雨しくまて
椽の美のこの露もうつすり
寒里の秋を破よ打出し
ひとはらまもくなのたのしき
み夜之夜と流て返しして日ハ暮ぬ
志くれをよとてこの虫のはく
あつそらと色小出る冬の雲

斗入
有隣
涼臺
東園
草軽
如水
田象
一峯

恨ミ忘まじく身ハ去つらすら　東向
宵〳〵の雨にも膝をならべて　山明
芦の穂すひの汐をまつく　五嶺
うきふらひうかげを見て岩も色　風葉
やたらは呼ぶ窓のうしろ戸　有隣
一濡りに豆板を頭より廣け　斗入
なまることほして人の覚りかね　東園
花の春も建も沸き浮世まて　涼臺
田にうつるを分く墨のより目　如水
春風にいそがぬ牛をうちやるめ　草輅
今ハ矢瓶の浦との田くさめ　一峯

かし〳〵と雲母摺ある夕日かげ　田象
櫻の木陰すずんで見ぬ作　岨　山明
象に頭巾のふるきく退放し　東向
急ぐ仏にほろ〳〵きまなり　風葉
常と浮縁を作りこの露なれ　五嶺
寐られる月も短夜の月　斗入
山吹のよりも法ゆるぬ見事れや　有隣
石よ玉揃ふる東の汐と　涼臺
なまなりに刀さした者と見られて　山明
気らう〳〵と庵く雨の杉皮　草輅
たたり小蟹のはける小六月　如水

衣をたゝむ旅そうれしき　田象

峯のあらに魚さり付るおこし米　一峯

畑うち習ふ桂木屋のうし　東向

初花の咲しや伊賀のみのうち　東園

くはの雑子に年いそぐなる　草輅

梅か香の梅みにとるや肩の上　草居

見渡せは桜花なり咲になり

青柳の面に輪のぬけになり

鶯の啼よりて暮日ものか

此寺の夜ちかまさし朧月

白帯しの眼によくすゝぬ月夜哉

月かけの陰を扇のおとて酒白よ

本陣さひに西雲のたつみ月に

暁の蛍涼しくきえに帯り

晴日たゝふ人の世かなり衣更

白菫や花ねすゝる花の彩しき

秋風の吹てきこえとるなり

人里へむかふて麋の鳴夜かな

目にさゝき労のひまより酒の恵

西ちかく降とも秋の月夜かな

露をはらち下りて立出く路る一ツ

二日月とゝ雲に志くれて細しくれ

神前に又むしかの聲きこえ

せハしなに小鴨かすたハ月ハ出

時子香池貫切橋志元寓

きりゝしたとさへ夜の名残けり

子にわら深も世のさう深あるに

侍きてなにかぬものにも朔の秋

おほふに寒冷もなほ秋の風　むら

志のきりくのいとこ孫　毋

白ふもら墓に埋ミ亭

月河ハ松に落来る雁の聲　有隣

ちらしくとされに暮たり秋の風　涼臺

秋の夜や月芳紅山の所はくは鉈く　風葉

霧しくれ穐のてくふも濡るく様　一峯

片山に出る居て唱統雪の簾　如水

ひらくと将かも散るゝ雁の月　田象

旅人の夢も更たり風の暦　山明

稲妻の身のうへにもかゝりけり　東向

秋夜の大粒了浮身秋から　五嶺

秋の風雲より先ハ筑波山　草軽

山うきり星ハ出きり虫の声　東園

我のこゝろゆかぬながらも秋の風　峯明

初しくれ神子まてぬれて庵哉　、

紫の雲は花しめほとゝきす　可雲

鶯の夜や出たらしと積る雪　文恭

ひと夜さを十夜さに葉の八日哉　袁鈞

何の桜在し情しまる千々の月　一貫

鶯の夢をみるとてまてりけり　文和

露こほれ身白き虫の廣野かな　杜皐

きつねしは二人濡れたる身の恋　陸二

踏迷ふ野路や雉の一声の中　之畊

やまさらのふしてゆかしかり雲の峰　羽文

青柳は朝寝坊きて逢哉　湖明

若草やきのふにかへる日の夕　呂居

笠脱帯も流よりみる桜かな　弄山

下京ゆる坂は人まつ春日かな　之勇

峰ますみ紀山のあさは春の風　蘭芳

竿の穂や川邑に月の橋り切　雷斗

春雨や羽づくや家襟の雨　芳耕

鶯の何より八重き曇りかな　清泉

世演や月にちらちらて鳴衛　太雲

朝廉や角にかけ見る法ね葛　古儞

小流花とる四手にかゝる春菜哉　牧童

霧立て茶か山も見る月夜かな　芦洌

鴈かねの遠さかる月にかゝるなり　若草

むら雨やはれ行空に月の鴈　元志

擣音とその火ひろふて夜寒かな　其潤

小男鹿の音を啼く月もなかりけり　甘潮

ひやゝかに芦の入江となりにけり　彭川

秋の風みしり紀芦のふしの音　其政

虫啼や秋よこけり草のうけ　何尺

霧はらし雲ちりあかや月の雪　亀年

萩の露一すれにこたまなり　呂丘

去の庵眺らは誰か人や夢ん　瓜坊

我上に啼つるやとおもふ秋のくれ　莫二

若竹のはしより這入るやこちら　空阿

鶯ハそこへ落れて高の声　月峯

露と見れハはらからし我の寸さすき　浣巻井

明月や我のそこにかけにけりけるかし　我十

落る滝の白らむなくしの思ふぞき　松巻

雲もとる高を花咲く日和哉　祖明

月を以てもてなし山のひくき　竹茂

来る夜に縁りて鴈の来る夜哉　里古

郭公来る夜ハ人も寝ざりけり　起北

すつぱとつなが兔なり其の字　猿老

鹿なく夜酒乏しく來よかり　白亀

其の庵に流れ寄るものか　文兆

梅咲て七日なしよは白ひなり　路人

竹に嵐れて露零れなり漱月　五什

さゝ波や荻やさまとのきしの花　希言

江の身鶴背から西は降りよかり　柳荘

鵠降てつむか芭梢にかり　奥之

蚕の子の盥に抱かさしのかた　長我

落て咲かし庭の新芽るなかし哉　音女

夕かぜや根芹流る田になく蛙　一素尼

はらくと時雨て通るふさし哉　雲帯

あさきよりせぬ真かなり亀　硯松

なつかしき香爐のひとめ棒かな　若人

妻の衣や今朝もて宮の立なから　素檗

鶯といつか蒲でそ兔ふ来なり　玄光

ひとゆきを先へ切りかへや首の月　呂利

人の来ぬ蓬そそなけき　蛤かり　芸門

きしの声身はむかし松にかゝりなり　鸞岡

むかしの日はくさとやむしいなの花　一之

とにかくに嫁らまぬものは身く徐　壺伯

沸しさやもてなくに・ゝさ　芭　蕉雨

あらく起す神の田はらを鳴わくる　鹿古

卯の花の流ぬ水ハ春なりけり　五六

神杖の雰まもたえぬ戸夜哉　田禾

落鳥と飯りけり松の夕かな　車大

稲妻や捨ころぬ家房　五芳

白菓に汐かゝこの蔵庭かなり　貞松

見はらし居ま六秋萩秋の露西之外　萬井

碑々やかけひの水の寒き日に　北坚

昼の茶ものたしけれとくきくしん　一草

琵琶園の夜吉をゆらし
又室をはじめ白始り白
七日ハちときまて又しんゝる　少汝
柱をつらしく室ハ古しくよ
出す

ゝ宗　紀鳳

嘸ちりききかをりしのまへ　岳輅

茯苓を皺んと示の根まつきぬ　草居

芯ばし居なれし波蘋の浮雲　暁臺

なまくと映るの張火桶　羅城

死るてくやしき夜をうそへぬる　士朗

桂垂し朝皃さへ帯る霧の月　白圖
とのゐもきれ袖ゆらしふく　呼道
兼平の塚の名ありハ八条　岳輅
清水も川とて名静なる　草居
よき紅花の咲出る安き里道　岱青
一戸田の千部し細とき　紙鳳
侍の子ありし妻あらハ年寄　士朗
深鋼のやうに引し阿弥陀の利　羅城
本の名ある法家の太鼓仰出し　暁臺
人まかせなる國の武佐ふち　少汝
不しく雀集る日移きん　呼道

俵の豆はらりとなり　白圖
志ほ垂れくうつせと乾ぬ手織布　草居
親よりくおくれ旅用意する　岱青
楫の音又切遠ふ夕川　岳輅
八まさ根堀の佛の手の月　士朗
郭公伯父坊ひとり安ちつし　少汝
やゝ法ちまいる歯の抜し時　暁臺
三尺の袖を隠らずちら者て　岱青
硫黄の嗅よむせる神棚　草居
春風か進ときの余けに吹まくり　岳輅
鶯の形　象の　ゝの　は　士朗

曦の水汲こほせ花のうけ　羅城
きんくん賣ヶ袖のやまふき　少海
閑居鳥隣の山より鳴になり　李渓
夕けの草まとゝする時鳥ハ　涼華
ゆふ顔や瓢のたけハ五丈斗　吾涼
松こゝふ人の出そふ時鳥ヶ谷　文推
雪ハ隣まへ鳥なり夕計　樗堂
鳥はれハ鳥を待らの曲郎　藍堂
雲風を曦の葉や落氷　玉眉
山の井ま影落らあへそ男七夕　若翁

月代や峯もまき見ぬ雪のいろ　汶弄
面白きましえら白き梅の花　狂雪
隣こゝして来く我宿の袖時雨　馮月
灯ともして人ま忘ら逃に冬籠　寅ゝ
時雨ほを雪ハ隣らしと初まなり　呿良
鷺ヶ浮や川音の中ま咲出綾　風坡
沸しまや蜷をこれハうしろ向　素郷
露霜くまゝ小ゝ紙来画れなり　乙二
加茂川ま扇落しなり流れなり　雄淵
ゆつゝしと尋る雲ま露しら　白居
小萩露小笹ヶ雪見まる流紅　五明

夜萩の葉にすかりて哀なり　吾長
風落て名無蟲のきゝに鳴なり　春鴻
天の川山よかくらハ秋の明ん　来雅
手折来る草ハ白かれ秋の異　作良
人の来てうち流し泣きなり夜の床　漢甫
正月ハミな鶯のこゝ語り哉　可都里
藪椿このうへとりん松ハふし　葛三
閑古鳥うらまそハ人のうへを啼　皈童
うつくしき風のひまより鶉鳴　壽来
帯衾慢牛の角残らくしなり　春蟻
何事ぞのや花なき山の杉の霧　寸来

秋の哀れ鶉がなかく黄昏なるを　菊明
落葉して日なくこみたてる桜かな　成美
うちしぐれぬをものゝそなたれ菊の数　みちまる
うそ鳴や茶のうまさの山中しよ　巣兆
かいりと人のとひなり蔦の葉　双鳥
百舌鳴くや枯木の雫止よなり　李明
薑菜よき家四五軒の柳かな　涼化
梅の月人の目鼻の見ゆるなり　長翠
山をも出れハ世ハ元の秋の風　青阿
何つ色さの立なかりなり錦帥　椿堂
睡すらう語らてさゆる秋の鶯　豆作

雪竿やゆきとんかよなく雀　汶水

家宿も桐の木枯て秋ふかき　滄波

峰よりも峰つもり雪の日残映　菊羽

二ッ家の朝戸も明け雪の峰　方鳥

雪の尾落んとしては山ゐり　亜溪

大雪や桜さえかえし人の心　志宇

小雄鹿のうしろにあく流かな　于當

閑居る流れ出すり松のうせ　許風

荻萩をれし出た露の月夜に　馬涯

大ひなる御門をはしぬ秋の暮　騏道

きぬらきや二つるたる　旅衣　重厚

玉江路や端に蹊るも稲の花　月居

梅の枝のひよいと出てり建仁寺　魯水

雪のうへにかざく紀の橋渡しけり　其白

初時雨ぬれしの残る旭かな　其成

山際の山を屏風にう紀森雪　官鳥

枯のふ縁ともいたぬ人と涼しけり　白池

馬の背に仲の子守し流ぎの夜　二柳

枯芦のおとろふ声けり初時雨　大江丸

榛桃ね裂さ見てく葉の月夜に　標堂

花すゝき秋の心をさびしさかり　方中

秋の山松もられくもなき見られ　梅價

松山へ秋をまとふやむら鳥　長齋
月秋や戸口にさら帛し笹幕　自樂
白露を王子宿して起居かな　喜齋
花すりの罪ありぼさん秋の月　友國
筆の風露に浮し書り白ひかり　國瑞
明方へつゝ見る旅かり萩の声　魯隱
啼娃まさびの人家なのらく　青霞
三井寺や夜もうしこも枝の秋　葛齋
遊ものをとゝ啼らん采居る　啓甫

蓑虫の命をつりと啼きたり　耕涯
蕪あり卯の花咲ぬに縁ものへ　素外
浮漆中まで八山杜鵑ほとときす　光雲
此れの葉はこそのいふ往来かな　彫門
来ぬまでも紅楓子人のもみぢ　草人
紫陽の花もさるきも紫よる葉　大阜
闇となる種とみひさ時雨かな　卧央
秋の花白きはいろてあつかなり　白圖
来て見れば八百の花もなし小夜砧　物戴
むら雨に妹か身夜はうつ紀なり　徐英
鶯やとの聲はあか胡の身　大魚

梅柳く夜やまて来やまだ月の秋　騏六
花落て茄子と成とふらぬ　壽松尼
咲花をしらぬや秋むや峯の雪　方明
みしか夜にまう出しさかや廿日月　羅城
夕月夜やよ其の芒を人のもり　墨山
露の月冴出ハ更る山路かな　庭甫
ともしへやとのうかな花に接りけり　昆明
秋の夜床より家の別れハ了其　竹有
飛とくもりし簾の中から入声　斗入
肌寒き紙の葉のうへさく秋の風　桂五
秋の夜にわの踏折る枝かな　岱青

帰る雁と見出との秋の夜や　少汝
秋の夜をとへと答へに萩の声　松兄
秋の夜の芒をそのむ山路哉　紀鳳
秋の夜ハ更けりつの枝木哉　天老
秋の夜にとのく古筋の虫の音かなり　岳輅
秋の夜ハ保に独さへ哀なり　士朗

世の秋の井すなは飛行人を嘆く摩
見かまし虫の声の上なり人の
物とひ得物かあり物をかく
小集とハなれりけり

尾張朱樹叟　士朗

ふるのはしくにありし白くとに捨ひて
かくはいつれその世しききにゆるく
まなかりしとの十とも文身あしくみえ
あかれの志ころ加治ふかき地草庵に
たのしみ年八志家に

橋日記

十三夜の月見て矢作の橋もとに
待ちくその浄瑠璃ひめの回縁に
待てはあれはおもふところ物語の
由緒枯葉人候に盛ほるのを
秋の夜ふけてまし好の月　暁臺

天地の中に橋ありてふの月　桃生

楼に月さても大きな座敷　白居

さしあたる題なく

たゞ萩も萩のおもしろさに一日二日と
りかゝるに日をかぞへ指をさしく
おもひぬ

我を呼ぶ旅人にせよ秋の風　羅城

きゝときゝやたくみる人の鹿の聲　重孚

一切衆生悉有佛性

こゝろしの湖にさしこむの月　自樂

流れ出るおのゝ里をも啼く雉　閑叟

きつねりと水に落つく妻見ゆる　栁荘

白菊や果ハさびしき蝶の[illegible]　白図

根にあへる[illegible]菊伝ふそ蝸牛　全

たつ霧や身ハなれてしうき雁鴫　竹有

蝶々の身かとも紛しきものゝ道　青霞

佛しさにつゝ遁ぬきまくもとて　長叟

むまるゝと松風吹く時雨哉　壷伯

空や上人いかんもせでは世人
に八引ちかへれしきれを行の[illegible]
なる山の唐のさまりきとて
都四条の辻に萬送引廻して
往来り二八行徒のつゞかさなり
きるうとまこそあらまほしくもなき
まくも待るる身患癡の身には

おもひやる月見もゆくへは山は
そひのはそひく人のある月
有もやと三河の国は何りん
したる人をとらへ出てそめ
大樹寺といふ寺はまゆくて
まへりぬ又瀧の山ちゃふ示
行清浄ノ遊ぶ茶にしてる火
霧の庵に夜ぞ氷声を濯く
白雲の旅は秋の気をとゞめ
またり行りうしき旅すきるは
新年りとしまりく松の岩根は

昼を出れぬ　士朗
花を浮たる月夜は瀧のうへ　天老
雁渡るあとも跡る音ぞうる　了国
妻の雪白らすると降まかり　入素
落くるむ西の三や虫の声り　月居
一家の秋ハ露くみる十枚す　雲帯
妻の波をされはまた立てる
湖を
秋の風我もうふ影し　某　方明
小冥越
秋の夜の芒たのむ山路　紀鳳

甲斐根

ぬき足も露に蔭家晩きく山路かな　墨尚

光琳か松すも似たり秋の月　一草

西風や柱のうちへ浪の家　茶二

我軒に雀啼なり秋の暮　大魚

さびしさの肩ふも菜の旅寝かな　杉六

投かける草の葉にゑまよかり　芦丸

日の暮に毎夕ぬけたるさくさかな　眠上

其田のこてふ参くらく挂るかな　美知彦

竹醉日

はふれ加り竹に岩かる旅のうちかな　岳格

こうしのうらを隠るの蟋蟀かな　雄淵

木枯しの足の跡や伊勢の山　予近

宮の中や此すもひく枝の山　子縄

よしの中まで秋見よ来しく初枝魚　越鳥

たちよる雁の中ちからも秋の暮　卓池

秋草にあしもひきこめて手お亀　きゑ女

けふもなくて菊の菊の花　其成

副将軍藤戸ちも度八継地の縁の玉藍に黒糸威の鎧きせ（ろ）うきたるの右翼しきさに鍪掛地の鞍をおきたり
馬　鞍　鎧　甲

弓矢も刀よいらぬまで治まりも
てり輝くやしよ出たくされハ
気のつかりしやれ麹なり
ぬ筆ふして末の露への夕かな　岱青
仏その影みかり手附白なり　墨山
蔓うき世の人を見送るかな　于當
つらしし亀の咏歌擂かな　素洲
年のくれ日
たく屋るをも年惜むとも問れけり　㩹堂
ゆりしも立ふさかれよもの足　芊拱
ひとり綿身に気さえぞ啼る　素篥

結そへし萩もあらしの様かな　闌更
淋しさを筆のたよふ板戸かな　蕉雨
ちる梅に催されたり春の風　卧央
海棠の花濡れぬ月ハ名のみなり　友国
陰しの名みもと留る四月かな　棋價
夏中夏
さえきれ右枕よきハ若狭山　士峯
春の月せられと云ふ寺に出まれ　成美
加きつけて夜ふも月すむ琦かな　亜渓
雲の春秋方よと句ふ桜かな　其谷
ゆるしとして春にわふ柳かな　可都里

鳩の鳴里のうしろ藪咲にけらし　魯隠

大平山眺望

られ竹の葉ふりよりこそ秋はあり　素外

浮草のたくひるあらん二日の月　寿覧

降出してある時雨しく出にけり　菊明

旅にあれは太ゝこの香を石の寿　如高

梅か香にあらし縁とはなりぬ　杜石

十月一日石山寺にのぼれ

我もあめに日ごと菊をめて如意庵　大阜

松原をぬけて出さてや冬の山　若人

ちらつきのやうなあられの朝かな　大左

うつくしき山見てそめて朝ぼらけ　大浣

老鹿の角をふせて一あらし　圃未

丹波の山に山居しける

世に出れ門とくはあり松尾翁　青阿

外の花にそり流く芋の桃かな　斗入

あさちふも萩の出上と成にけり　桂五

綺女房といへる山家にて

冬木立も旅る日はなし帰しかな　少汝

りんこうちしても旅の一衣かな　椿堂

萩にもよるもうつりかきあらむ　亀年

きさらきやかしくしらさく　旅硯　都裘

汐見坂

月影や沖のゆふしに寄る舟　魚日

八重汐明やまだき旅をとふかり　騏道

宿屋やされと都の香のそし　無曲

月ならすを八雛子の裾むけの縁り　五明

旅やにもまれしうこくまぬれ行　升六

梧葉吹秋晩

さしむかる燈火ひくし秋の夜　啓甫

風に身をまかせと寄る旅寝哉　徐英

旅人にかゝりつけり

旅に行歳暮をきく雪見かな　卓池

旅に行る人もとゝまて月見かな

その夜ともの衣るゝや

また月や人のもの見ぬ花すゝき　松兄

九月十六日の河しく

月と日のあいふ小波ら不落の山　士朗

程もなけハ木の名ほと晴きる秋　岳洛

まふとれハ粧静也花すゝき　少汝

寒されハ漁村の柳枯になり　士朗
小簑をかふる多の人数　卓池
屏もなき灯の出るに日の落て　岱青
人離けゐたる宿の帰り出た　羅城
鳥羽もえつくみとに狭ぬるん　岳洛
給の西ハ比ゐもあかる　我　紀鳳
一夜宿も抹まふ府をとおくとき　池
仍ふ気や鞍壷にふる舟底　朗
尾のよ常山松あうけ止まる　城
茶かる時なぬのせんあり　青

されハこそ真を無に時雨　鳳
勝まうは牛まつちなる　洛
去る秋はさし入る汐をとき返し　朗
去りし名うれなるらの非言　池
我宿も人のやうまも何くさて　青
鏡のうしゝに落る原りしを　城
秋風のふけハそ花の志はひたる　洛
露をを拾ひ出る椎の葉ふ　鳳
空に佃城の人命も二日の月　少汝
皆うちみて馬にのりまる　方明
洲将の川よとくハ垂るの奥　池

義へうけたる今の大盃　朗
中くに加りとく思ある戯ひら　青
たそこの露をを掃ふは気も　洛
柁よふさ波華の絶ゆる冬の味　明
杉そよ毛多くも閨に冱えし　汝
雪隠りに灯の付くる鷄の聲　朗
ぬるとつくさねこく桐油の手たたき　池
梅櫃の木下ふきふる串団子　洛
菓子のかゝを捨る琴く緒　青
夏の夜のみ了うきしも程おもろく　汝
氷室の山の身をやるゝれ　明

心理をよそをさめては花まうけ　池
ところくのかあきての ひろく　朗
角川さてもとむかひ端の花咲て　青
まつ年の日に四ツ谷を買　輅

士朗　六句　紀鳳　三句
卓池　六、　少汝　三、
岱青　六、　古明　三、
羅城　三、
岳輅　六、

蓍の眼集

秋の風吹落てすむ山のあし 岳輅
よるくろは月の出羽 士朗
薮白ふ埋ふ錦の紅うさし
杉むらさい流るゝちやむ淋しさよ
才三の輪をへきさるとや習字の 岱青
よきにふあら花よく仏は袖をとる今
白ゝ下弱る文字孫そや
藁の子ゝへかうそ公をしなるふ 羅城

寛政十年戊午秋九月

殿ちり花を汐しやゝ呼かえて
鶴の餌小なる鶴をもて来る

朗

輅

れりし返易安小来るとき浪の
を江小花を寄る仙槎のまし

おもてハかくしてそわりさくを

城

序思ふ花としまかりぬ紫のを
けふしふ開きてふしけたつねる

青

人くしもやしなう家居よ埼るや
もう附をよく工風仕るたふり疑ふを

輅

すつし
舟ふ日記を記すちゝし浪

朗

秋小馬のけるむかしたる附小也之ち
娘を任せて白浪とわろく姿絶たるみきハ
ましけれての附節を引返しける
書れんとよるのり

青

おりしるまと身ひする木ハ足かわれ
旅りといへる帯るより探出る
附かさなるハをとり仕ふるを
けるみまて旅く道筋ろきなるを
なくらり

菜耀ふ付し恵の小姫
一るの仕手不古下ふさむしる

城

ところに手也附肌又不可説の妙や

蝶や来て侍従が墨やおさむらん

●一巻を閲するに此第二句始て俳家の
真を離れ此附近きさるにや近きも一季
やうんかゝる場にあるべからず

花ふりかけ込らさつまの月

●此句の評を誤く前句の面へかけ
たる罪不浅

一筋ましき菜畑の素りちらしひ

初潮らしく来て躍き川　張

まさに今こそまとまふなるべく妙也

朗　　輅　　城　　青

夫れハ露の唱声やありけりして
上の五字此一巻の調子をもしるけり
其の字なし　てにをはにあや此
句も其の字あるハよろしく其に
確とさるべく年を惜とハよ柄
うするなし　惜哉
なしめかしも打をしき去に
名あるり御門の市と千住ん
ころもを脱しふ水八九尺
ある僧の姿とみるより折詠め
うかるくに勝ぬるなすり

輅　　朗　　青　　城　　朗　　輅

今の間に皆焚梅は英子の花　城
朔日や日を拜む伊勢參　青
此迄は白黒子の交りのごとく清と
して僕にも労見るに不佳元禄を世の
調とならぬもかへるそのごとし
何人か思ひなしてささやき　軺
鬼女の面をとかくすうしろ手　朗
古湯衣孫の振子の忘られ　青
鳥の羽ちるもはつ秋松　城
椿の香をすゝく月の明かし　朗
此迄子白自然と象の白にしおさる

いかなる友にかよしとつゝく見るに
附節皆新るの始を知るのさせめて
さえてる手際にて見るにはやし
来ちの沙汰の売る寄にもし　軺
此一句鶏群をぬきいて白雲鶴の立るごとし
絨源の家まいとしとにまふるき　朗
嵐をあくるましおいをする　城
兎角して人に整る新法師　青
此三句八俳家の要領のてくもなく有之
世八七をつりし紅梅此集　軺
津け方実に如かなり美画せり　朗

花の鋏横ヽ筋ちひゐ水かんなてし　青
又若芽せり
捌るゐはりの気ゐ秋へる　城
あしきしもなたちと気の二句の
ゐたれハ花の取りの深山木
やよあつるつくもなし
一ヽ表
秋風や人やりなしぬ旅ころも　依青
あした秋月の消る白萩　羅城
ともふりしらひゐ脇なり

なしくヽ夏ほ滝ハちるんアクよよ　岳輅
こゝ白月夜の家とすら不若そまよ
けきさて窓窗かしぬ人句小サ刀
のさしふりいら佐とそうやいそん
蝶たけ海の川の沸しき　士朗
滝しりとのかりゐとれもひまと
たれしも下沸しきのとハ第句よ
きりきたるゐるべし
涼夜の津の気きと神る松の雲　白図
ゐる月をしきなゐらゐと手東句の
餅もありなるよし

草よふこゝは生まて白ふするまてそ
油絵と言ふものゝ事そんとふ
んまこゝろし黄花れ書るふんまを
舞子ぬ世て来る風流も何まても
ありてふりすへて殊にまさりある
きのふかんし主指ハ独をかくらん
足もの人るる何ふ様ぬやまよ
面白ここ命や虫れたこむくす
海をうらいとふより堅坂の宮へ
たのしふるとい方事の命ごまふ
かくて詠みふるしとやんる人をして

紀鳳

桂五

青城

芽俵を生やしむ
はなしさへこく暮る春の春しき
ゑふぬ花の月ふさしかる梓弾女
萩藤をゐるて所新あり
はるぬて附節の古めきたるまこの
一る按ろる継を歳重ふかまゐ
たもし八幽玄の融通をとらしるひ
知るゐつはしとややさん
風呂ぬ弱の煮へこ限出たる数夜も
まさやそての編替をつ附ふはんす
しらふをとりのるふり目出とし

輅朗園

鳳

さし芽ふさと藪に香れの臉ん　鏡
うふふあゐ道筆うふ及めるをゑへる
維人の維う八不知ゝ懼可伏
むてら紅梅の花矣とも蟠ゐし
緋をとうつれまわろしの花
承恵ふ春山霞引付つる
以やましの白の連綿をよんする
実證喜の源をそく
やうくとる明和の人
魚涌二日ふこ了の極漆川
すきりそしふ佛の勝うけ

雨晴の川みそゝふきちかくら
ゆ纏今の花やうゝふそもくる
年くふ気まん穀つる誕生日
以一句及むしやうんおもりて賞る
菅原氏の家かおくまし　歎
花白をりん出しるうもくす
扇折のほ阿縁ふとうゆりさね
みや
山鳥の苔するやうんこゝろ
おりふもみを水かわく
御に洲へ罾の連ハなりそ

其角叙

このかくひるもろきまりの身

翁叙

二ッ三川　能引はくむ草の花

誹人叙

きれくにある松のうけろふ

妻や子を呉竺箕の山路にあらと云

ひとつもし

執るをほりて八志ある帷帯

別堂しき

雪さへもしみちきつしと使出し

圖

鳳

五

青

城

輅

深川

むかし隣の塩竈を焚く

何ら時の気侶臣の首をたやつされて

何の走もしれぬ八諸元の年

こゝまでのありさ波実に吾居やり

更居やりはよみ文伝をとゝきさらん且

茶をみまきる事し計居らしす

来てあん走は今を桜むあらし山

花は茶みすしみうと出たるより

はすてのおのもと気色え見おかし

かりうたるみや今人の作なる事

朗

圖

鳳

一

五

きすぬかまた蓋かゝりたるハくちらん
とくあふへし惜しさ
あふのんもあくて見すてのことく
運ひせるんおそしなん際てしもかる
やしきし常ん田ひか月か
雨あとあるとてくまたかある
よきおけ白なかるさき
井見道彦か詠
おくまし
如斯

軺

立かへる流のくらもちよ雉子の声　岳輅
月まつほとを広庇秋をたてる　白圖
藻汐焚く岸の桜のちりこそて　紀鳳
とたれて扇をハ落る宗の居　士朗
雨二日墓前領しや出ぬらん　圖
ふほひけたかきすなハ来ふなり　輅
世ふなき御家を琵琶なくあそ　朗
ゆぬかちふ雲をきゝさま　鳳
ちかしらしよりは梅を思ひあ　輅
牛飼補なうき数を清む　圖
萩か植の風の夕浪あけし　鳳

宴もかしこも花ハ色も咲きぬ
武士の名もしほるれ秋の風
手綱ハ結ハ衣の紐解して
世にもれぬ後の小家ふもとの閑ん
おちこちのかゝる霧ハ雇するき
よかやみる竹ハ化粧ひの色さむく
二月運ふ床ハ深けるの
さましよしハぬきなる妻の泳
詫なきこみをふきるほるる大人
うしめしき綾の小袖を押かし
いつか焼ある恋のせきそり

朗圖　輅　鳳朗　輅　圖　鳳　朗　青　輅

おしきぬのこまでとまりの海
さしあふせの便やまのけふもち、
つきすけく来と我結む法の君
七文字作るあすあけの月
足までの秋ふハ添ぬほとゝきん
萩みあみしゆむ膳前の庭ら
捧るき酒のつしえうして
馬の尾ちぬらるゝふるなり
浅沢ハ板を並べふ衣ひろん
魚の綺麗ふ佛こもち出ん
風向ふ螺ハるまき吹うねて

圖　鳳　朗　青　輅　圖　鳳　朗　青　輅　圖

昔日書く三藪の胡[illegible]にけ　　鳳

百とせに花の木末とさへすらん　　朗

あらの[illegible]ねつるる力の[illegible]ゆふ　　青

枇杷園に桜花の昔を知るもとにいふこのを
おしみてやいふくにひきむすべしや里に
粘[illegible]をしたりやうふてさひし日比は俗[illegible]にも
おさいて思ふ所もなくもとやましらぬ年毛
たるかの所に[illegible]をくるし越て摩[illegible]康の夜を
あかるむきかるそ[illegible]しきく昔ハ人への

諸ひ来て[illegible]花にふるをよゐたるよ年の夜
いとこをくて一席たふにまさるひはいてさしはハ
俗をとらせん[illegible]にふ[illegible]人道方[illegible]に言ひ
おこしたる二世の[illegible]に[illegible]あるを見て業
み一[illegible]をいひそくたまたに言の種と出ると
なりて白圖紀鳳[illegible]書岳路士朗等の[illegible]
ともに[illegible]にしいるのまりけれ

花と絶望理

鶯の梅に啼日やみちの月　士朗

やまのとの吟ふ冥人の春　青川

雪きゆる窓の茶鐘のうき物て　方明

冬は舞てやる気のあるの空　岱青

石井の茶の茶にまれひとつ　羅城

水ぬるりにくるゝ夕くれの雲　竹有

加賀の多緒二冊の古寺極ちく　少汝

お嫁させるに来旅て嬉しき　岳輅

又見ても人の見さる観つし　天老

のきはさゝきのとまる松かさて　松兄
構ふ色も女と君ハうくり来に　川
松ともつゝ清ぬや　後の魂棚　朗
うらす鳴声まくの月代よ　青
久米路の往しる蝉も未む　明
風姉け八獅出る人の髪あて　有
夜切の札ふ義ゝるり泣　城
藪垣も花の千波と成たり　洛
草まねの志川く　狙の露　汝
八重霞十の湯壷まうれ出て　兄
山清しきにわ出とちもなし　老

一ろす錦あけよくと急く　なり　徐英
初音のすゝハまさし深の　袖　青
柏尾花何をかまねくと招客よ　朗
田わしの富をそくく神ゝ家　川
猫寺けなる綱ひとつ走りけり　明
ふみり侍くちる　碑ヶ井の名　英
松とふき出み風出海も書尾　青
琴の音ふ絵よ渉なし　よる　朗
月かけの薫子掛る組わくしけ　川
会佛も霧よ津む山さゝ出　明
あさくと揺も横なさや遊ぶ鏡　朗

沖徳利あて聲く恋しい秋　青

松の宮詣し連ニ銭拾ひけり　明

時ならぬ嵐の足の綻め紅　川

花ちりの関屋に曇る霞の宿　老

鶯の住る日の見ゆる松山　兒

士朗　五勺　少汝　二、

青川　五、　岳將　二、

方明　五、　天老　三、

俳青　五、　松兒　三

羅城　二、　徐英　二、　竹有　二、

鶯はしかりとまり

鶯来は猿る翁も欲し

十七題

鶯

鶯はものゝ隠るわしらぬ哉　少汝

鶯の唱遠近も夕ゝ哉　方明

鶯行啼うつりし梢の雲哉　仝

春

散附の友に在る梅ハ月夜哉　青川

うぐひすに立る宿る縁居ゝ哉　天老

小雀の浮まとり散く梅の花　仝

春月

まるの身わらハ生出す鶯　羅城

むつましき秋の詠きまよ春朧　岱青

玉ゆくつくれハ寛し春の月　仝

春風

煙り人家も嫋くよなるの風　大阜

宵月の雲ハ春風も吹なり　青川

漁火も浮くよかゝり照春の風　仝

花

咲くる咲く又なき花の蜉蝣か　士朗

春よりも詠くまする花れのうつゝかな　少汝

ちる花ハみる西行の泪かな　仝

柳

氣晴くハ鶯のなかも柳かな　天老

汐ちしるまゝ飛をま清ふ柳かな　桂五

月よ清へ春き柳と成りけり　仝

若草

若草よん煮そさしぬ鴨うかな　青川

若草小三日月拝む旅雑かな　岱青

わかくはよ秋ハ詠け安し丘の春　仝

帰雁

いなつまや稲のはしくを留　青川

夕月をかゝて立人も影ハ一ツ　竹有

あたゝかき雨て下る秋に志ら鳥　仝

雛子

雛子ではけハきのふわすく鳴雛子の声　岳洛

をれハちる岩れ陰よりきしの声　大阜

松低きいたゝきしの夜明かな　仝

みる哉

鶯の余波に跳る流かな　方明

うくひすの声ふるはまた人はなし　羅城

鶯や傘傾しくるの上　仝

蛙

旅の夜と寄せハ鳴出に蛙かな　青川

湖へかゝる見すけてなくかりの　岳輅

昼さくと蛙のふえる夕かな　仝

菜花

菴の菜や二日摘ねハ花に咲　桂五

そよ風の花のなかさまくおのく

一句井は余ひ鶏のこゑ

菜の花にそ見えすらの柳ころも

のくつひかれしも歌さくめハ諸

けしきもみえに雀をきくに　士朗

ちうえく

菜の花に蘭湯く峠　雀　仝

春夜

春の夜や闇し寝よき香も　移香　青川

春の夜やあけるもをしき月朧　松兒

あるみの松のなしひに低き出額かな　仝

蛙

かけろふの井をとりまく蓮かな　竹有

蛙やるの泉つく中の庭　白圖

蛙笑に庭の塵も見えれけり　仝

田にし

田螺鳴水のさえた大徳寺　椿堂

菰島のうけや田にしも音ふきて　方明

かくやての音そこて鳴田にしかな　少汝

款冬

山吹の一流は水のゆかしかな　岱青

一えくとの山吹ちきぬ瀬戸哉　徐英

やまふきを離まく松のゆかりかな　仝

若草

引春にみをふすてゝ橋の上　松兒

たゝくさに芽くも春はゆかりかな　士朗

山の井に流るゝ春の余情かな　仝

松の炭乃序

大白ヵ詩ハ不用意をもて
出生残滑なり今古の八巣
道人かこの集を編る湖茅生の
おもくしるなりまたく
今入すなりもなし見るなを
書閑をりまさくかきなくし
たる所り而然意のうちに

已来 書

乃謡ひかりけりさしそめし
何ま爲もすさ斎也し
と黎た晴りてりも又
その之しうしやおてふ
江山風光の粉をぬきたる八
何某さてよ
律来書

朱樹叟
士朗

松林庵

ムかし雅松ハ古さよりわりに
翠苔の水を湛る菴の戸
藁蘚とく小篆の跡のあやしそ
緑ふ花ある山をとめてくる
枝枯の屏風松さへしと振はれ
そろもさまぬ玉・筆の運
松菊を新宿の深草人をゆかす
石の羅漢よ携りける沙汰
ありしを先にきれたる名を知らさん

蕉雨
岱青
士朗
素外
壷伯
岳輅
桂五
駄六
臥央

鑄のむくの切れ　聖火人　白圖
澄精を吟じおもひし明方に　少汝
無常を彌しれ　舟に三千　雨
さんしよに咲かしたる鼓策　青
命の先き汲きりくしれ　朗
得志はり闇を見て春に分る書　外
豆腐の味のこゝろ起りかり　伯
鞍山の影々疲て軒の松　洛
圓に病人の華の芽をとる　五
春風を留またとへて小淋翁　六
けふまでに帰りハ山色　汝

切先ハいつこの不動まて　圖
琵琶を撥まで衰をわれ　央
雪の袖雪の袖を起し清く　雨
加の宮か家の中にかくれの弱　青
うつゝ流るゝ身の枕激の入ける　朗
秋の先研し　高のさゝく　外
廿日年より陣西　師の家にき冥　伯
濡にいひ出る新得の為　洛
旅房のかへりも旅ぞ女郎花　方明
蜀の切染の時る　竃　梢　圖
面の名を記作の得きハ西の京　外

強將なる法に筆たる男かんなよる　朗

胡簶（ヤナグヒ）をつまむの衣はしつゝく　洛

日うけの垂き岩の角く　雨

咲花の匂ふる寺に八重霞　青

馬刀（マテ）貝鍋むしるを今朝にて　明

蕉雨　罒　騏六　二句　岱青　四句

卧央　二、　士朗　四、　白図　三、

素外　四、　少汝　二、　壺伯　三、

方明　二、　岳輅　四、　桂五　二、

夏

先ゝ雨ゐまつりてわとこきれ　洛 闌更

花の空ぬま縁あり書斎の時看　、其成

一葉まま闌いさけたりわすきれ　壺伯

夏ハたく五中あろり身軽わ　三川 入素

咲蓮子の花の庭ふて一筆しれ　素檗

七夕の窓よやうそ縁る道はり

わとふてるり

ほかくとりえすおすれるの罒厨わ　ミハリ 卧央

卯の花や海月によひの朧かけ　李三

誰も手ぬきの夕暮の牡丹哉　ヲハリ 木人

竹の子や小関守出たる寺の人　尼 壽松

蚊屋を出て紀の母ららとて寝るさ　柳荘

風の浮かるゝ柳にかゝるみぐ成り　奐之

菜の花ハ宛ら後ハ見えぬ黒髪哉　イヨ 樗堂

信中

帷子に白雲かゝる山路外　ヲハリ 蕙外

若葉やら若葉に近きたる三日の月　一之

夕月夜の晴るゝ中や三井の鐘　ヲハリ 眉光

一句書て入んと古池に夕日の

寂門草白なくハ入毎にるらしく

あかきハ

夕顔の関をふるゝハ卯かくきれ　ヲハリ 岳路

父や子や宿押合て行ち稲舟　菊溪

若添ややく浪高き岩のうへ　知足

うき草ハ依兄ハ多ふきき家　ヲハリ 桂五

かくれたり九く出来た芽の幡かけ　篠青

みちのく一見の土紀

松島やよつ島ハ世にかくも多　イセ 青阿

秋

万代や山のうへよりけふの月　士朗

名月や出やて惜きこともなし　蕉雨

引絶せし中秋の空ハ雨しも
須臾名月ふ雲の原よいかゝる

関ハ荒れて礎のこもりし　ヲハリ　方明

忘られぬかくこそすゝまるさく　仙タイ　白居

ふるとほり大猫のさはいそし
むつましけるかな　アハツ　重厚

不破の月雨を雲なき夕かな

旅の月長きさむしの命かな

秋ならや生死をかけて草枕

幻為の山寺に仮寐しぬ

ものゝ杖をあらはして雄も聞て飛也　ヲハリ　紀鳳

蕣は生てふやうれし小家かな　ヲハリ　帯椂

一葉ちり落る玉ざさぬ芋の葉に　素兄

関さよぬるともりて花さかさ　イセ　椿堂

花のよに日数過よりぬ女郎花　ヲハリ　啓南

蓑むしの蓑をかふやかの杖　楚枡

桜の葉ふり落ても実のかり　忍阿

草菴

胡蝶しきりを弥さかや蟋蟀　ヲハリ　羅城

萩あるて日向ぬりて芭蕉静　秋田　五明

秋のちからあき風に吹こされけり　伯先

蜻蛉や何やら気さく廻り　ヲハリ 蛙聞

稲妻のけハしくかゝる枯枝かな　洛 丈左

角力とりやゝわすれて力たらし　ヲハリ 木吾

鹿鳴て懐に入るあらしかな　兆如

月見る人の中より小夜砧　石馬

雁啼や廿日ばかりの月の秋　倚凡

不二見る日数日後も秋の收穫　菊貫

立かへり鴫のあとに渡りけり　三川 卓池

菜川や杖にかまへて鴫の声　カイ 可都里

冬

初時雨雲の間ハさらさらさら　江戸 成美

枯蘆の藻屑を打るさゝなみ　ヲハリ 墨山

時雨しさまよき窓より外の月

なつかしき陽よりかゝるしぐれかな　升入

花もはや咲りしまる葉の一時雨　ヲハリ 白圖

冬の日の長き米に登るあかねかな　双烏

咲すぎし花咲つゝ枝も寒りけり　ヲハリ 兆雲

寂しさと老ひ芒穂に出て夕嵐　、大阜

老いくしく身拾ひける枯野かな　、青霞

生海鼠ともに浪のうきうきに入日かな　大魚
こがらしや菜の葉に包む鴨の足　駢六
鴨番ひ同しとしてくらしかな　雲帯
芦枯るゝ日毎落るよ鴨の声　ヲハリ 方翔
かれ芦や浪ハよせても返しても　竹有
木がらしや魚の眼の粒丸し　物我
ふゆもなく菜はよこぼるしくれかな　梅好
初霜やわりなき昼に草の上　ハン州 玉屑
暗部て霜の椿なく旅寝かな　星巴
あはとふらしる雪見えてめで明けり　如毛
初雪や小笹もとの霄の空　ヲハリ 徐英

雪の日や落るかなの鴨の足　三川 桃生
張たくき者ふかく菜をえらみ哉　壷伯

春

花の戸に巻くく年よる菫かな　濃州 道彦
おもくふさとくにやこそ桜にあはれなり　ヲハリ 延至
魚飛く鳥もり花の流かな　凡子
ともしびや花ようつりけり　ヲハリ 昆明
有酒但須飲
花に寝てさくら見と話るかな　左皓

白梅やあかり白けに人も来ず　升六
梅咲くや押絵読本山家まで　ヲハリ 艸人
月を見に来ぬ
庵の戸や月の中より梅の花　蕉雨
梅を見に来ぬ
上臈の膝のうへまで月と梅　可紅
鶯やおもふ所に落ふとん　信 鷺岡
一節も春をとのこさぬ柳かな　洛 月居
人の柳やすくくも縒みかな　長翠
柳見よ切人なつる八葉かさん　江戸 宗讃
挿木盛かくよかくて春の暮　大津 騏道

柴の戸や琵琶の音聞む朧月　菊麿
小山田や蛙よかしき夕かすみ　千葉
高く飛て蝶の風情の見えぬ也　ヨシノ 可翠
豪心の露は春でもなかりけり　山皐
月影のこまかに落て佐保かな　洛 百池
色ふかくうれし清き花の香も　五芳
洛の庵水かはしてみてし
永き日や絶えぬ桜を散てハ切　ヲハリ 少汝

光琳か千鳥嘘や古畫扇　士朗
蚊帳に光る鴨川の月　蕉雨
笹根まつ道の隈〳〵人ふえて　壺伯
手鏡の面にたゆれる柳　朗
うつくしき齢を今の負ふらん　雨
鞨鼓の音の止むときもなし　伯
峯〳〵ハあけぼのゝ雲吹合を　朗
柳のなびき春ハ来にけり　雨
堂守の壺に一枝花さして　伯
手のうち計り藥味噌を焼　朗
おもき出る同やも謠をくせる也　雨

今の間に来てふらるゝ山雀　伯
見しらぬき光来も年の市にまふ　朗
樵作る霧の哀もしらす　雨
精進の音の哀ある小の夜を明て　伯
魚も洞を移くるちつろ浪　朗
亡骸の熊とふやすて根さちや　雨
落葉の雲を掻る末寺　伯
関越の山路も多の名かれハ　朗
ひとりもそうな御湯を仕出して　雨
文字清音清の言葉ハ多かりけり　伯
結んぢやうらんうつしの言の葉　朗

水のよもすがら繁なり隅田川　雨

能寐る人にまかるるふ海　伯

あやしの額つくろふ古画　朗

走り付たる板倉の文　雨

一押に出帆渡船樋の谷　伯

萩の衾ようきつられしき夢　朗

紗なる咫尺の霧にかくしなれ　雨

いへばたやすきと耳かしの山　伯

ひなもと会こそ捨し松の葉を　朗

とろくあつ火ハいそくその宿も　雨

あかしと見えもち歩り鳩の声　伯

垣根のうちへ下駄を投るも　朗

桜でも菫でもなくて胡の花　雨

この出月とよむぞゆかしき　伯

士朗　十二句

蕉雨　十二句

壷伯　十二句

増賀は信を出て西行は須磨に
志るされたる芭蕉翁の真蹟なり
世に芭蕉庵の笠標としいふ
枇杷園に秘蔵しけり雪中の
人我等もしりをきと敬まひ
けりさる縁として今年の初冬の
芭蕉此園中に遊び来たり

家徒りさゝるを合せ浩しく
出ねとは追ひ来るよし杜子美の
頃は祝たまふ人の時雨の吟をし
ぬまさむ松風と共に見しをひけハ
さはれかりてなり縁に敬して
なりさてなるをそ如くなりける
竹青

さひ渡る三ツあり夏の月　士朗

山さむしの秋なるきす　蕉雨
あるきさき茶摘車をまちて　蘭更
一むら竹の撓ふ姿し　大阜
紙きぬの袖は破れて縫ひかけ　臥央
煤掃ける人を呼ぶらん　壷伯
隙に寄る薦の枯蔓引むすび　駅六
額のなるきし大り雨出まれ　方明
乙のみをしらぬ居の継にかけられて　桂五
十の小袖をあつらむ広蓋　延至
またしらぬ秋を吹はせ松の風　昆明
烏ハことの惜きなつめやし　素外

そろくと鳥羽の墻に人出て　少汝
垣結ひ足に井の静なり　徐英
蝸牛の角ふと出ひし櫻く麻　毬青
読みつたきはなは花のちるし　岳輅
かゝ枝隣いつこの里に芽をよせん　白岡
手ならに海苔をすゝふ夜浪　竹有

八巣　蕉雨選

玉くしけ集

いさゝ花錦縫金に内中堂に桜かさくまよ
さしむかひて社中の揃ひ安住ゝ以八の以数を
其稿を主に託し白図を人に頼病気の由断杖の
終まさて又廣はいう室の主麻しく
なまゝく梅嵐菴白居老人は甚か物かの
石岐猪ふるに括らしめ置けて志らしむる数
九月十八日より平臥にて身もは世を去りよ
羊治をても知しむ入ての志りうるみ松島の投寄
九月廿七日十月郡に上原にて病し
社中八名三人つゝ豊来ておれ不中に投雲か

居たる間ゝあとのみかせや遊は述 社中三四人
梅雲引様ゟおくしてと思ひとて右勝中のこり
十月二日の夜ニ病白川れハ雄渕ニ家とるゝよて
わく家のうよ在ゟりゝ白ゟ
とかくせて其日ハ菊ぬ聖白すあし 快事
床の上にあきあり梅そうよ白一句ゆりゑ
いきまたる梅雲傷よ居家て筆を取ハ絶
此る存生の虫踪ゝ自筆ゝあるすむへしとて

七十七年の夢さめぬきハ

仰うすもかし

踏く由く棘も牆も打のなり

寛政十二年庚申

とある書へ自筆ゝ書納て自然ふさても若めき
生母うらしとてさくに床ゝ中なるひなるゟ世く
労とゝ云へゆし謙ミ筆讃りんてす出来ゆは
さらる梅雲ハさらそきる中ゆりて帰葩いさし
中し十月五日ゟ朝雄渕料は三曲といふる志を
桃もとに帰て左ゞ村棘の句を又案りされハ
右は右付是ハ秘して授よと云る死後ニ句の
八事も左る人はあるの間まてとやされたる
都ゝ葩中の事なるも家に家あるし
此事も悉ふうりしに表半る一分さし家り

申以て卯三十月九日の庵にあくひろき往生を
遂られ申しは先生の党撰社中誰ならず
けふこそ我迄も見舞ハ免くと思ひきハ免ハ一定
さすが菊月よ臨て出しまゐ志ハなくは
九月廿七日の日に祈祷の俳諧も廿人
あまり集りて勤申すも人々お集りにて白
晩申は遊しけ文を受取りては白圀老人の少年
年来の勤に引つくろひてならし十月十一日
葉提所大同相北山元圀寺と申すへ葬送
お念勤一七日も光とも迎まて夜半待申しは
社中百人余り送り捨ち送り庵ハおくれ

雄淵か引うつりて申当分居ハ拾ヶ庵
之を社中吟味之上拝江留守居まで
引うつりしも先に庭花子も不来来ニ
琥形菴引続之方にお糸申はあれハ此未そ
はへこそ老人存後雄淵え句論社中一同
審東子物を差ひ申ては庵中は年々を案ですら
四十九日は先菴ふて志をなしの追善いたす
は昔し序内余り営し往復之有営は候し
二月上旬申まては仮暮西は毎中ハ句編
集樹第蓋山翁木不残追善の句一句
は自ひかりし先ッハ右為は知代をめし氏

此はしに

庚申

十二月廿一日

暮雨菴卧央撰

こそはあさくおつゝけて寒

此筆しつかり

蝸形菴

雄渕

十二月十三日

琵琶園興行

みちのくのふゑに法楽し名所

あつまし□をうつる冬の白

ふつくとうくひすの寒氣もちて

法名もみしぬや紅葉を折

衣ゆくへ寒さききたる菊の月

樵をよへかりうとをとる秋

川掛る干鱈は漁の法なるやし

梅園の宗らしら雲になる

士朗

羅城

岳輅

杉兄

桂五

天老

少汝

魚堂

読人のたふみ出るよしの山　羅城
あはやといつも矢を耳に寄し　士朗
かほ隠す人の舵取り戴きて　東水
丁たちわらはれ十六夜の雲　葉水
つめしに水子吹しく萩の声　松兄
いとく露けき座に居る裏　岳輅
きのふから精進ぶりの法を守る　天老
法の油へ預ぬむ京坂の酒　桂五
咲たれば皆連も見ぬ水の雨　魚堂
田すしか留ハ数を散らる出家　少汝
こつろもと猿の会得を鳴かなひ　士朗

香網の市に鈍一葉すゝめる　羅城
寒やけむりのれの旅すゝて　葉水
うきあつ気にハ松葉にくれ　東水
文をばそれそれ見つる秋の続　岳輅
御座をとらむるとしの閨寺　松兄
法まくの法玉の法にえつり花也　桂五
拙りの妻をつかむとかえり　天老
茎の草を手折て縄を去れひ　少汝
千繍儀を法せる砂　魚堂
剥ぎふきかゝる二日月　羅城
読まつまは法く妹か学問　士朗

かるかやも縦ほかけの羊あるき　東水
琵琶の音ゆゑ風の枝折戸　菜水
梅ハいのち穢れ果の鶉衣　岳悟
恩する亀の乃ゆゑもしや　松兄
古の恩に年重の名をや継らん　桂五
雲居禅師の後のかたろよ　天老

しくれハ又みすほらしき芒かれ　桂五
扇はきて松もかくぬしくれかれ　琵六
しくれしや蔵に一声は雀　白図
川添ハすへて日ぐれの附句所　名卯
志かも添へまつもをても麻の腰かな　青川
てふくと大津絵ぬるくしくれ所　帯梅
しくれにも八日の河しくれやき山家所　十竹
八年雲のひそくくるかとて附家所　延之
秋のあけもみねこそ雪むら附句　来山
是かゝるもいよりも山へしくれ　民情

かゝしとて夜に入作のしくれかな　大年
志くれする夜はおどおく宿かな　嵐堂
鳥ひとつ立おくれたるしくれかな　周瑞
ちるもくの時雨もしらぬ葉末哉　何と
しくれ来る秋ハ松くの身成かな　加つ
時雨してやまと春山の身成かな　雷洲
新鴨の沖へ立けりしくれかな　昆明
山ゆきの枯木にかゝるしくれかな　大蕪
時雨の松ハしられぬ志くれかな　布泉
蜜の子の驚ふり出く時雨かな　葛井
姉風ハ耳に目に降しくれかな　也人

時雨しと月ハ入ともはよ時雨　蛙岁
十月も十日なれてむらしくれ　方杉
蔓ものきれくよする時雨かな　卓迸
ちりてよる松ハ時雨の身成かな　東旨
秋の時雨先かしくれのいろりしき　蛙石
志めりや人まつんをたき山の秋　可仙
ともまれハ時雨をうたる金つけり　五雄
庵深きをつかや志くれの東山　竹有
志くれてハ耳しるまでハ鳴らん　猪未
山寺はねてさへ広きハ時雨なり　可暁
まじらをうらみけり時雨かな　山郎

厭しくれよ濡て鳴出る小鳥かな　五柏
おち鴨の飛出る浪のしくれかな　圃暁
けふもしくれ家いつのことおもひやり　左雀
志ぐるゝや宿ハ松風杉の風　霜居
草の戸ハ錠もたゝぬ時雨哉　庭甫
砂栗やしくれの跡の濡た夕き　書閣
ひうくと鹿鳴峰のしくれかれ　草人
むら松の声も苦して時雨けり　也雪
寺出ハそとしくれて帰られ萩の声　蕉雨
山はしもは菓家のたゝぬしくれかな　岳临
声もなききゝのすも鳴ぬ独しくれ　素琴

家庵が葉種林出ハ冬しくれ　墨山
青すゝき萩やすゝき手折しくれ　少游
はやりしや月をうしろのむら時雨　亜洲

同十八日

桂菴下興行

松ふしの岩を隔てりかれ尾花　白岡
人をちうらぬ意の世丈　大年
雲清る日は志ぐるゝもの音して　卧央
揚ねくの淋さし笑けしれ　錦英
我か川里をいうにうるひぬらん　竹六

戸を閉た錦に一筆の折　橘良
椽の背くけむりて霞かゝり　竹有
雀を追ふ風か早くなすり　延之
いはつ星火のちらく移る細わたし　昆明
はまよりうへを洗ふちのうち　布泉
鳴神の雲の棧ちたしく高　士朗
猫うつ氣る置うはの移　白岡
手よあするもの知し流らしく　文年
つゐと立切るのしろ洗を　孙央
山みちの風を樋よ秋あるも　伴英
赤小豆祭したく正月の月　雅六

花ひらくとハかゝれあき伊勢すれ　橘良
かはを抱手よたゝみ川舟かう　竹有
川端よ大臣の妻をうき居也て　延之
末やとし高し錦国のうはは　昆明
書くしと思ての数のしきりかわ　布泉
関はわりよみゐ木を編しかゝも　士朗
はふもすゝ志づかて吉備津の橋　白岡
ちとりかうて山中とくきます　文年
膝しく杜丹の花ハ奈良にて　孙央
女ぬすみよ人をとゆる　なすり　伴英
都の雲の包むか末過ご梅の里　雅六

蛇骨は松のむかふ秋の流　橘良

十六夜の走りをひろけたる芋の上　竹有

松しろかりし夢の種をとゆふ　延之

まつ採の家の書をおもしひ　昆明

朔日をかならず戸のいそしき　布子

花過に見けこの色の芦きて　士朗

板家の障子をとまりる毎人　白鳳

ちきりてもちく桜も美しき　西湖

とく見てもしつひ水かける　竹有

夜更てとなくて月ある祇　竹織

けふさとも風まうさくよ枯尾花　天老

冬かれの中よ枯なるをみかるか　松兄

むかし菊のよしみしとよ枯をみる　葉水

かるく植られても月の泊きされ　英二

見取よく枯るものなし枯尾花　方明

世なかをよそをなれ三夜也雲ちきれ　哀山

何けるすき風中も今かく尾花　玉江

松一本抱かれしのをはるの菊　橘良

襟をかれしけふ三人のちまち　素兄

尾花枯く秋の面さへさびしき　扇洲

花それかあらし常に落葉掃ねられ　魯堂

かれ〳〵の花を見るに哀や霜の声　硯静

みる影に尾花枯て淋しかれをはな　きを

をはなかれたる古郷を焼ならひ　石老

かれしてをはなにこほれ実なるかな　五道

尾花かれて枯つくすぬも哀さ　大魚

紀の海の波こえりつゝも枯尾花　木人

ひとつ家のいよくちさし枯尾花　伯輝

ひかりをとめをさる枯たる小庭かな　魚秋

枯尾花をかく年に兎りなり　古舟

雪のふるたびきえしいたくむかし枯花　兆山

家山なる枝にかれたる枯花かな　承水

屋かけを拾ひしをみ枯にも枯ぬ庵　松雨

柴垣いかゝ加へて来るすすきの枯尾花　魯石

さゝくもなき花きし家の枯花　老斗

川風や流しくもの枯尾花　柳仏

枯たちしをみるもしまる雲かな　拙静

うれをたるなる跡して夕日かな　由之

志ら露の籬の寒さよ枯尾花　如秀

かれなきたる一里小余る川の風かな　梅園

枯ゝ也尾花枯にもる夕日の月　蕎秋

荊萩せし跡もうごきかれは老　菊人

遠の間もみえてふくなり枯尾花　沙鴎

かれくと淀山茅ぞれ枯を花　蘇水

むらをたるかれくも菊八かくるなり　魯圭

蘭に老ゆる風にふくなり尾を花　尺底

白る淀との露子枯たる尾花哉　艾張

かれを花菊八海を淀らひかれ　亀丑

みる度に枯るやうなり枯尾花　秋游

日くるしや花と花とみてく桂のくり　古跡

かれくるもを花かよその花らかくれ　魯堂

甚壷に峰留八芥しかれを花　徐英

枯るとく ふし雲ほ雲やの枯尾花　枝堂

おもふ折かれくかよ跡る行しきぞ　士朗

枯尾花らや汐の骨と云るかれ　卧央

批七録三上平主

第 ~~19774~~ 61166 號
受入
昭和 36. 3. 14